

倫敦消息

夏目漱石

青空文庫

(前略) それだから今日すなわち四月九日の晩をまる潰しにして何か御報知をしようと思
う。報知したいと思う事はたくさんあるよ。こちらへ来てからどう云うものかいやに人間
が真面目になつてね。いろいろな事を見たり聞たりするにつけて日本の将来と云う問題が
しきりに頭の中に起る。柄にないといつてひやかしたまうな。僕のようなものがかかる問
題を考えるのは全く天氣のせいや「ビステキ」のせいではない天の然らしむるところだね。
この国の文学美術がいかに盛大で、その盛大な文学美術がいかに国民の品性に感化を及ぼ
しつつあるか、この国の物質的開化がどのくらい進歩してその進歩の裏面にはいかなる潮
流が横わりつつあるか、英国には武士という語はないが紳士と「いう」言があつて、その
紳士はいかなる意味を持つているか、いかに一般の人間が鷹揚で勤勉であるか、いろい
ろ目につくと同時にいろいろ癩に障る事が持ち上つて来る。時には英吉利がいやになつて
早く日本へ帰りたくなる。するとまた日本の社会のありさまが目には浮んでたのもしくない
情けないような心持になる。日本の紳士が徳育、体育、美育の点において非常に欠乏して

いるという事が気にかかる。その紳士がいかにも平氣な顔をして得意であるか、彼らがいかに浮華であるか、彼らがいかに空虚であるか、彼らがいかに現在の日本に満足して己らが一般の国民を墮落の淵ふちに誘いつつあるかを知らざるほど近視眼であるかなどというようないろいろな不平が持ち上つてくる。せんだつて日本の上流社会の事に関して長い手紙を書いて親戚へやった。しかしこんな事はただ英国へ来てから余慶よけいに感ずるようになったまででちつとも英国と関係のない話だし、君らに聞せる必要もなし、聞きたい事でもなからうから先ぬきとして何か話そう。何がいいか、話そうとすると出ないものでね、困るな。仕方がないから今日起きてから今手紙をかいているまでの出来事を「ほととぎす」で募集する日記体でかいて御目にかけてよう。出来事だつて風来山人の生活だから面白おかしい事はない、すこぶる平凡な物さ。「オキスフォード」で「アン」を見失つたとか、「チエヤリングクロス」で決闘を見たとか云うのだと張合があるが、いかにも憫然びんぜんな生活だからくだらない。しかし僕が倫敦ロンドンに来てどんな事をやっているかがちよつと分る。僕を知っている君らにはそこに少々興味があるだろう。

この前の金曜が「グールド・フライデー」で「イースター」の御祭の初日だ。町の店はみんなやすんで買物などはいっさい禁制だ。明る土曜はまず平常の通りで、次が「イースタ

「サンデー」また買物を禁制される。翌日になつてもう大丈夫と思うと、今度は「イスター・モンデー」だといふのでまた店をとじる。火曜になつてようやくもとに復する例である。内の夫婦は御祭中田舎いなかの妻君の里へ旅行した。田中君は「シエクスピヤ」の旧跡を探るといふので「ストラトフォードオンアヴォン」と云う長い名の所へ行かれた。跡あとは妻君の妹と下女のペンと吾輩と三人である。

朝目がさめると「シャツター」の隙間すきまから朝日がさし込んで眩まばゆいくらいである。これは寝過したかと思つて枕の下から例のニツケルの時計を引きずり出して見るとまだ七時二十分だ。まだ第一の銅鑼どらの鳴る時刻でない。起きたつて仕方がないが別にねむくもない。そこでぐるりと壁の方から寝返りをして窓の方を見てやつた。窓の両側から申訳のために金か巾なきんだか麻あしだか得えたい体の分らない窓掛が左右に開かれている。その後「シャツター」が下りていて、その一枚一枚のすき間から御天道おてんとうさま様が御光来である。ハハーいよいよ春めいて来てありがたい、こんな天気は倫敦じや拝めなかうと思つていたが、やはり人間の住んでる所だけあつて日の当る事もあるんだなとちよつと悟りを開いた。それから天てん井じょうを見た。不相あいかわらず変へんひびが入つていて不景気だ。上で何かごとごとという音が聞こえる。下女が四階の室で靴でもはいているんだらう。部屋はますますあかるくなる。銅鑼はまだ鳴り

そんな景色がない。今度は天井から眼をおろしてぐるぐる部屋中を検査した。しかし別に
見るものも何にもない。まことに御恥しい部屋だ。窓の正面に筆筒たんすがある。筆筒というの
はもつたいない、ペンキ塗の箱だね。上の引出に股引とカラとカフが這入はいっていて、下
は燕尾服えんびふくが這入はいっている。あの燕尾服は安かったがまだ一度も着た事がない。つまらな
いものを作ったものだなと考えた。箱の上に尺四方ばかりの姿見があつてその左りに「カ
ルルス」泉の瓶びんが立たっている。その横から茶色のきたない皮の手袋が半分見える。箱の左側
の下に靴が二足、赤と黒だ、並んでいる。毎日穿はくのは戸の前に下女が磨みがいておいて行く。
そのほかに礼服用の光る靴が戸棚とだなにしまつてある、靴ばかりは中々大臣だなど少々得意な
感じがする。もしこの家を引越すとするとこの四足の靴をどうして持つて行こうかと思ひ
出した。一足は穿はく、二足は革靴かはんにつまるだろう、しかし余る一足は手にさげる訳には行
かな、裸で馬車の中へ投ほうり込むか、しかし引越す前には一足はたしかに破れるだろう。
靴はどうでもいいが大事の書物がずいぶん厄介だ。これは大変な荷物だなど思つて板の間
に並べてある本と、煖炉だんろの上にある本と、机の上にある本と、書棚にある本を見廻した。
せんだつて「ロツチ」から古本の目録をよこした「ドツズレー」の「コレクシヨン」があ
る。七十円は高いが欲しい。それに製本が皮だからな。この前買った「ウアートン」の英詩

の歴史は製本が「カルトバー」で古色蒼然そうぜんとしていて実に安い掘出し物だ。しかし為替わせが来なくっては本も買えん、少々閉口するな、そのうち来るだろうから心配する事も入るまい、……ゴンゴンゴンそら鳴った。第一の銅鑼だ、これから起きて仕度をするると第二の「ゴング」が鳴る。そこでノソノソ下へ降りて行って朝食を食うのだよ。起きて股引を穿はきながら、子ねにふし銅鑼に起きはどうだろうと思つて一人でニヤニヤと笑つた。それから寝台を離れて顔を洗う台の前へ立つた。これから御化粧が始まるのだ。西洋へ来ると猫が顔を洗うように簡単に行かんのでもことに面倒である。瓶びんの水をジャーと金かな盥だらひの中へあけてその中へ手を入れたがああしまった顔を洗う前に毎朝カルルス塩を飲まなければならぬと気がついた。入れた手を盥から出した。拭くのが面倒だから壁へむいて二三返べん手をふつてそれから「カルルス」塩の調合にとりかかった。飲んだ。それからちよつと顔をしめして「シエヴィング・ブラツシ」を攫つかんで顔中むやみに塗廻す。剃そりは安全髪かみそり剃そりだから仕しまつがいい。大工がかななをかけるようにスースーと髭ひげをそる。いい心持だ。それから頭くしへ櫛くしを入れて、顔を拭て、白シャツを着て、襟えりをかけて、襟飾をつけて「シヤツター」を捲まき上ると、下女がボコンと部屋の前へ靴をたたきつけて行つた。しばらくすると第二のゴンゴンが鳴る。ちよつと御おあつらえ誂つらえ通りにできてる。それから階はしご子段ごだんを二つ下り

て食堂へ這入る。例のごとく「オートミール」を第一に食う。これは蘇格^{スコットランド}土蘭人の常食だ。もつともあつちでは塩を入れて食う、我々は砂糖を入れて食う。麦の御粥^{おかゆ}みたようなもので我輩は大好だ。「ジョンソン」の字引には「オートミール」……蘇国にては人が食う英国にては馬が食うものなりとある。しかし今の英国人としては朝食にこれを用いるのが別段例外でもないようだ。英人が馬に近くなったんだらう。それから「ベーコン」が一片に玉子一つまたはベーコン二片と相場がきまつている。そのほかに焼パン二片茶一杯、それでおしまいだ。吾輩が二片の「ベーコン」を五分の四まで食い^{おわ}つたところへ田中君が二階から下りて来た。先生は昨夜遅く旅から帰つて来たのである。もつとも先生は毎朝遅刻する人でけつして定刻に二階から天下つた事はない。「いや御早う」。妻君の妹が Good morning と答えた。吾輩も英語で Good morning といつた。田中君はムシャムシャやつている。吾輩は Excuse me といつて食卓の上にある手紙を開いた。「エッジヒル」夫人からこの十七日午後三時にゆるゆる御話しを伺いたいからおいでくださいまじきやという招待状だ。おやおやと思つた。吾輩は日本におつても交際は嫌^{きら}いだ。まして西洋へ来て無弁舌なる英語でもつて窮^{きゆうくつ}窟^{くつ}な交際をやるのはもつとも厭^{きら}いだ。加之倫敦^{ロンドン}は広いから交際などを始めるとむやみに時間をつぶす、おまけにきたない「シャツ」などは着て行かれ

ず、「ズボン」の膝ひざが前へせり出してはまずいし雨のふる時などはなさけない金を出して馬車などを驕おごらねばならないし、それはそれは氣骨が折れる、金がいる、時間が費つえる、真平だが仕方がない、たまにはこんな酔興な貴女があるんだから行かなければ義理がわるい、困ったなと思つていると、田中君が旅行談を始めた。吾輩に「シエクスピヤ」の石膏せつこうせい製の像と「アルバム」をやろうと云うからありがとうといつて貰つた。それから「シエクスピヤ」の墓碑の石摺いしずりの写真を見せて、こりや何だい君、英語の漢語だね、僕には読めないといつた。やがて先生は会社へ出て行つた。これから吾輩は例の通り「スターダード」新聞を読むのだ。西洋の新聞は実にてがある。始からしまいまで残らず読めば五六時間はかかるだろう。吾輩はまず第一に支那事件のところを読むのだ。今日には魯国新聞の日本に対する評論がある。もし戦争をせねばならん時には日本へ攻め寄せるは得策でないから朝鮮で雌雄しゆうを決するがよからうという主意である。朝鮮こそ善い迷惑だと思つた。その次に「トルストイ」の事が出ている。「トルストイ」は先日魯西亞ロシアの国教を蔑べ視つすると云うので破門されたのである。天下の「トルストイ」を破門したのだから大騒ぎだ。或る絵画展覧会に「トルストイ」の肖像が出ているとその前に花が山をなす、それから皆が相談して「トルストイ」に何か進物をしようなんかんで「トルストイ」連は焼や氣きに

なつて政府に面当つらあてをしているという通信だ。面白い。そうこうする内に十時二十分だ。今日は例のごとく先生の家へ行かねばならない。まず便所へ行つて三階の部屋へかけ上つて仕度したくをして下りて見るとまだ十一時には二十分ばかり間がある。また新聞を見る。昨日は「イースター・モンデー」なのでとどころで興行物があつた。その雑報がある。

「アクエリアム」で熊使いが熊を使うと云う事が載っている。熊が馬へ乗つて埒うちの周囲をかけ廻る、棒を飛び超える、輪抜けをすると書いてある。面白そうだ。此度は広告を見た。「ライシラム」で「アーヴィング」が「シエクスピヤ」の「コリオラナス」をやると出てゐる。せんだつて「ハー・マジエスチー」座で「トリイ」の「トエルフスナイト」を見た。脚本で見るより遙はるかに面白い。「アーヴィング」のも見たいものだ。十一時五分前になつた。書物を抱えて家を出た。

僕の下宿は東京で云えばまず深川だね。橋向うの場末さ。下宿料が安いからかかる不景気なところにしばらく——じゃない、つまり在英中は始終しじゅう蟄息ちっそくしているのだ。その代り下町へは滅多めったに出ない。一週に一二度出るばかりだ。出るとなると厄介だ。まず「ケニントン」と云う処まで十五分ばかり徒行あゐいて、それから地下電気でもつて「チームス」川の底を通つて、それから汽車を乗換えて、いわゆる「ウエスト・エンド」辺に行くのだ。

停車場まで着て十銭払って「リフト」へ乗った。連が三四人ある。駅夫が入口をしめて「リフト」の繩をウンと引くと「リフト」がグーツとさがる、それで地面の下へ抜け出すという趣向さ。せり上る時はセビロの仁木弾正だね。穴の中は電気灯であかるい。汽車は五分ごとに出る。今日はすいている、善按排だ。隣りのものも前のものも次の車のものも皆新聞か雑誌を出して読んでいる。これが一種の習慣なのである。吾輩は穴の中ではどうしても本などは読めない。第一空気が臭い、汽車が揺れる、ただでも吐きそう。まことに不愉快極まる。停車場を四ばかりこすと「バンク」だ。ここで汽車を降りかえて一の穴からまた他の穴へ移るのである。まるでぐら持ちだね。穴の中を一町ばかり行くといわゆる two pence Tube さ。これは東「バンク」に始まって倫敦をズット西へ横断している新しい地下電気だ。どこで乗ってもどこで下りても二文すなわち日本の十銭だからこう云う名がついている。乗った。ゴーと云って向うの穴を反対の方角に列車が出るのを相図に、こつちの列車もゴーと云って負けない気で進行し始めた。車掌が next station Post-office といってガチャリと車の戸を閉めた。とまるたびにつきの停車場の名を報告するのがこの鉄道の特徴なのである。向うの方に若い女と四十恰好の女が差し向いに座を占めていた。吾輩の右に一間ばかり隔って婆さんと娘がベチャベチャ話しをしている。向うの

連中は雑誌を読みながら「ビスケット」か何かかじっている。平凡な乗合だ。少しも小説にならない。

もう厭いやになったからこれで御免蒙ごめんこうむる。実は僕の先生の話しをしたいのだがね。よほど奇人で面白いのだから。しかし少々頭がいたいからこれで御勘弁を願おう。四月九日夜。

二

また「ホトトギス」が届いたから出直して一度伺おう。我輩の下宿の体裁は前回申し述べたごとくすこぶる憐あわれっぽい始末だが、そういう境きようがい界がいに澄まし返って三十代の顔がんし子然ぜんとしていられるかと君方はきつと聞くに違いない。聞かなくつても聞く事にしないところちが不都合だからまず聞くと認める。ところで我輩が君らに答えるんだ、懸かけ価ねのなるところを答えるんだから、そのつもりで聞かなくつては行けない。

我輩も時には禅坊主みたような変哲学者のような悟りすました事も云って見るが、やはり大体のところは御存じのごとき俗物だからこんな窮屈な暮しをして回かやその樂をあらた

めず賢なるかなと褒められる権利は毛頭ないのだよ。そんならなぜもつと愉快な所へ移らないかと云うかも知れないが、そこに大に理由の存するあり焉さ。まず聞きたまえ。なるほど留学生の学資は御話しにならないくらい少ない。倫敦ロンドンではなおなお少ない。少ないがこの留学費全体を投じて衣食住の方へ廻せば我輩といえども最少もうすこしは楽な生活ができるのさ。それは国にいる時分の体面を保つ事は覺束おぼつかないが（国にいれば高等官一等から五つ下へ勘定かんじょうすれば直ぐ僕の番へ巡まわってくるのだからね。もつとも下から勘定すれば四つで来てしまうんだから日本でもあまり威張れないが）とにかくこれよりもさっぱりした家へ這入はいれる。然るにあらゆる節儉をしておかようなわびしい住居すまいをしているのはね、一つは自分が日本におつた時の自分ではない単に学生であると云う感じが強いのと、二つ目にはせっかく西洋へ来たものだから成る事なら一冊でも余計専門上の書物を買って帰りたい慾があるからさ。そこで家を持って下婢共かひを召し使った事は忘れて、ただ十年前大学の寄宿舎で雪駄せつたのカカトのような「ビステキ」を食った昔しを考えてはそれよりも少しは結構？　まず結構だと思つているのさ。人は「カムバーウエル」のような貧乏町にくすばつてると云つて笑うかも知れないがそんな事に頓着とんじやくする必要はない。かような陋巷ろうこうにおつたつて引張りひきりと近づきになつた事もなし夜鷹よたかと話をした事もない。心の底までは受

合わないがまず挙動だけは君子のやるべき事をやっているんだ。実に立派なものだと自ら慰めている。

しかしながら冬の夜のヒューヒュー風が吹く時にストーヴから煙りが逆戻りをして室の中が真黒に一面に燦いぶるときや、窓と戸の障しょうじ子の隙間すきまから寒い風が遠慮なく這はい込んで股から腰のあたりがたまらなく冷たい時や、板張の椅子が堅くつて疝せんきもち氣持の尻しつぽんのように痛くなるときや、自分の着ている着物がぜんぜん変色して来るにつれて自分がだんだん下落するような情ない心持のする時は、何のためにこんな切りつめた生活をするんだろうと思う事もある。エー構わない。本も何も買えなくても善いから為替かわせはみんな下宿料にぶち込んで人間らしい暮しをしようという気になる。それからステッキでも振り回してその辺を散歩するのである。向へ出て見ると逢あう奴やつも逢あう奴やつも皆んな厭いやに背せいが高い。おまけに愛あ嬌いきょうのない顔ばかりだ。こんな国ではちっと人間の背いに税をかけたらず少しは儉約けんやくした小さな動物が出来るだろうなどと考えるが、それはいわゆる負惜しみの減らず口と云う奴で、公平な処が向うの方がどうしても立派だ。何となく自分が肩身の狭い心持ちがする。向うから人間並外れた低い奴が来た。占しめたと思つてすれ違つて見ると自分より二寸ばかり高い。こんどは向うから妙な顔色をした一寸法師が来たなと思うと、これすなわち乃公だいこう

自身の影が姿見に写つたのである。やむをえず苦笑いをする toward 向うでも苦笑いをする。これは理の当然だ。それから公園へでも行くと角兵衛獅子に網を被^{かぶ}せたような女がぞろぞろ歩^{ある}行^{ある}いている。その中には男もいる。職人もいる。感心に大概は日本の奏任官以上の服装をしている。この国では衣服では人の高下が分らない。牛肉配達などが日曜になるとシルクハットでフロックコートなどを着て澄している。しかし一般に人気^よが善^よい。我輩などを捕えて悪口をついたり罵^{のの}つたりするものは一人もおらん。ふり向いても見ない。当地では万事鷹^{おうよう}揚^{よう}に平氣にしているのが紳士の資格の一つとなつてゐる。むやみに巾着^{きんちやく}切りのようにこせこせしたり物珍らしそうにじろじろ人の顔などを見るのは下品となつてゐる。ことに婦人などは後ろをふりかえつて見るのも品が悪いとなつてゐる。指で人をさすなんかは失礼の骨頂だ。習慣がこうであるのにさすが倫^{ロンドン}敦^{トン}は世界の勸工場^{かんこうば}だからあまり珍らしそうに外国人を玩^{がんろう}弄^{ろう}しない。それからたいいていの人間は非常に忙がしい。頭の中が金の事で充満しているから日本人などを冷かしている暇がないというよゝな訳で、我々黄色人——黄色人とは甘^{うま}くつけたものだ。全く黄色い。日本にいる時はあまり白い方ではないがまず一通りの人間色という色に近いと心得ていたが、この国ではついに人間^{人間}を去^去る。三舎色と言わざるを得ないと悟つた——その黄色人がポクポク人込の中を歩^{ある}行^{ある}いたり

芝居や興行物などを見に行かれるのである。しかし時々是我輩に聞えぬように我輩の国元を氣にして評する奴がある。この間或る所の店に立つて見ていたら後ろから二人の女が来て『Least poor Chinese』と評して行った。Least poorとは物匂い形容詞だ。或る公園で男女二人連があれば支那人だいや日本人だと争つていたのを聞いた事がある。二三日前さる所へ呼ばれてシルクハットにフロックで出かけたなら、向うから来た二人の職工みたような者が a handsome Jap. といった。ありがたいんだか失敬なんだか分らない。せんだつて或芝居へ行つた。大入で這はい入れないからガレリーで立見をしていると傍のものが、あすこにいる二人は葡萄ポルトガル耳人だろうと評していた。——こんな事を話すつもりではなかった。話しの筋が分らなくなつた。ちよつと一服してから出直そう。

まず散歩でもして帰るとちよつと気分が變つて来て晴々する。何こんな生活もただ二三年の間だ。国へ帰れば普通の人間の着る物を着て普通の人間の食う物を食つて普通の人の寝る処へ寝られる。少しの我慢だ、我慢しろ我慢しろ、と独り言ひとりごとをいつて寝てしまう。寝てしまう時は善いが、寝られないでまた考え出す事がある。元来我慢しろと云うのは現在に安んぜざる訳だ——だんだん事件がむずかしくなつて来る——時々やけの氣味になるのは貧苦がつらいのだ。年来自分が考えたまた自分が多少実行し来りたる処世の方針はどこ

へ行つた。前後を切断せよ、妄みだりに過去に執着するなかれ、いたずらに将来に望を属するなかれ、満身の力をこめて現在に働けというのが乃だいこう公の主義なのである。しかるに国へ帰れば樂ができるからそれを樂しみに辛しんぼう防しようと云うのははかない考だ。国へ帰れば樂をさせると受合つたものは誰もない。自分がきめておるばかりだ。自分がきめてもいいから樂ができなかつた時にすぐ機鋒きほうを転じて過去の妄想もうそうを忘却し得ればいいが、今のように未来に御願ごがんい申しているようではどうていその未来が満足せられずに過去と變じた時にこの過去をさらりと忘れる事はできない。のみならず報酬を目的に働らくのは野暮やぼの至りだ。死ねば天堂へ行かれる、未来は雨あまがえる蛙かえるといつしよに蓮の葉に往生ができるから、この世で善行をしようという下卑た考と一般の論法で、それよりもなお一層陋ろうれつ劣な考だ。国を立つ前五六年の間にはこんな下等な考は起きなかつた。ただ現在に活動したただ現在に義務をつくし現在に悲喜憂苦を感ずるのみで、取越苦勞や世迷言や愚痴ぐちは口の先ばかりでない腹の中にもたくさんなかつた。それで少々得意になつたので外国へ行つても金が少なくなつても一いっ簞たんの食い一いっ瓢びょうの飲然のんきと呑氣のんきに洒落しゃらくにまた沈着に暮されると自負しつつかつたのだ。自惚うぬぼれ自惚うぬぼれ！ こんな事では道を去る事三千里。まず明日からは心を入れ換えて勉強専門の事。こう決心して寝てしまふ。

かかるありさまでこの薄暗い汚苦しい有名なカンバーウエルと云う貧乏町の隣町に去年の末から今日までおったのである。おったのみならずこの先も留学期限のきれるまではここにおったかも知れぬのである。しかるにここに或る出来事が起っていくらおりたくつても退かせねばならぬ事となつた、というとか何か小説的だが、その訳を聞くとすこぶる平凡さ。世の中の出来事の大半は皆平凡な物だから仕方がない。この家はもとの下宿ではない。去年までは女学校であつたので、ここの神かみさんと妹が経験もなく財産もなく将来の目的もしかと立たないのに自営の道を講ずるためにこの上品のような下等のような妙な商し買ばいを始めたのである。彼らは固もとより不正な人間ではない。正道を踏んで働けるだけ働いたのだ。しかし耶蘇教ヤソキョウの神様も存外半間はんまなもので、こういう時にちよつと人を助けてやる事を知らない。そこでもつて家賃とせこおが滞る——倫敦ロンドンの家賃は高い——借金ができる、寄宿生の中に熱病はやが流行る。一人退校する、二人退校する、しまいに閉校する。……運命が逆さかまに回転するところ行くものだ。可憐なる彼ら——可憐は取消そう二人とも可憐という柄がらではない——エー不憫ふびんなる——憫然なる彼らはいくまでも困難と奮戦しようという決心でついに下宿を開業した。その開業したての煙の出ているところへ我輩は飛び込んだのである。飛び込んでからだんだん事情を聞いたときにこんどこそはこの二人の少女、では

ない我輩より三寸ばかり背せいの高い女に成功あらしめたまえと私ひそかに祈念を凝こらした。誰
 れに祈念を凝こらしたと聞かれると少々困る。祈るべき神に交際こうざいの無い拙者だから、ただあ
 てどもなく祈念した。果はたせるかないつこう霊現がない。ちつとも客が来ない。「夏目さん、
 あなたの御存じの方でいらしていただく方はありますまいか」「さよう、実に御氣の毒
 だから周旋しゆせんしたいのだが、倫敦ロンドンには別に朋ほうゆう友というものが無いから——」。それでも
 せんだつてまでは日本人が一人おつた。この先生はすこぶる陽気な人でこんな家には向きか
 ない。我輩がほととぎすを讀んでいるのを見て、君も天智天皇の方はやれるのかいと聴きいた
 男だ。その日本人がとうとう逃出す。残るは我輩一人だ。こうなると家を畳むより仕方が
 ない。そこでこれから南の方にあたる倫敦の町外れ——町外れと云つても倫敦は広い、ど
 こまで広がるか分らない——その町外れだからよほど辺鄙へんびな処だ。そこに恰かつこう好こうな小奇麗こぎれい
 な新宅があるので、そこへ引越そうという相談だ。或日亭主と神かみさんが出て行つて我輩と
 妹が差し向いで食事をしていると陰気な声で「あなたもいっしょに引越して下さいますか」
 といった。この「下さいますか」が色氣のある小説的の「下さいますか」ではない。色沢
 氣しよたいししみ抜ぬきの世帯染しよたいししみた「下さいますか」である。我輩がこの語を聞いたときは非常にいやな
 可愛想な氣持ちがした。元來我輩は江戸っ児だ。しかるに朱引内か朱引外か少々曖あい昧まいな

所で生れた精か知らん今まで江戸つ児のやるような心持ちのいい慈善的事業をやつた事がない。今何と答をしたかたしかに覚えておらん。いやしくも一遍の義侠心があるならば、うんあなたの移る処ならどこでも移ります、と答えるはずなのだ。そうは答えなかつたらしい。ここにそう答えられない訳がある。なるほどこの妹はごく内気なおとなしいしかも非常に堅固な宗教家で、我輩はこの女と家を共にするのは毫も不愉快を感じないが、姉の方たる少々御転だ。この姉の経歴談も聞いたが長くなるから抜きにして、ちよつと小生の氣に入らない点を列挙するならば、第一生意氣だ、第二知つたかぶりをする、第三つまらぬ英語を使つてあなたはこの字を知つておいでですかと聞く事がある。一々勘定すれば際限がない。せんだつてトンネルと云う字を知つてゐるかと思つた。それから straw すなわち藁という字を知つてゐるかと思つた。英文学専門の留学生もこうなると怒る張合もない。近頃は少々見当がついたと見えてそんな失敬な事も言わない。また一般の挙動も大に可憐になつた。これは漱石が一言の争もせず冥々の裡にこの御転婆を屈伏せしめたのである。——そんな得意談はどうでも善いとして、この国の女ことに婆さんとくると、いわゆる老婆親切と云う訳かも知れんが、自分の使う英語に頼みもせぬ註解を加えたり、この字は分りますかなどという事がたくさんある。この間さる処へ呼ばれてその奥さんと談

しをした。するとその人が大の耶蘇^{ヤソウ}信者だからたまらない。滔^{とう}々と神徳を述べ立てた。まことに品の善い、しとやかな御婆さんだ。しかる処 evolution と云う字を御承知ですかと聞かれた。「世の中の事は乱雑で法則がないようですがよく御覧になると皆進化の道理に支配されております……進化……分りますか」。まるで赤ん坊に説教するようだ。向^{むこう}は親切に言ってくれるんだから、へーへーと云っているより仕方がない。それはこの婆さんのようにベラベラしゃべる事はできない。挨^{あいさつ}拶^つなどもただ咽喉^{のど}の処へせり上つて来た字を使つてほつと一息つくくらいの仕事なんだから向うでこつちを見くびるのは無理はないが、離れ離れの言語の数から云えばあなたよりも我輩の方が余計知つておりますよといったやいたいくらいだ。それからよく御婆さんを引合に出すが、もう一人御婆さんがある。この御婆さんがせんだつて手紙をよこしてその中に folk という字を使っている。ただ使っているばかりなら不思議はないが、その字に foot note が付いている。これは英国古代の字なりとあつた。「ノート」を自分の手紙へつけるのも面白いが、そのノートの文句がなおさら面白い。この御婆さんと船へ合乗をした時に、何か文章を書け、直してやるというから、日記の一節を出してよろしくおたのもうす事にした。すると大変感心したといつて二三所一二字添削して返した。見ると直さなくつてもけつして差^{さしつかえ}支のない所を直し

ている。そしてとんでもない間違つた事が例のノートの書いてある。この御婆さんはけつして下等な人でない。相応な身分のある中流の人である。かくのごとき人間に邂逅する英国だから、我下宿の妻君が生意気な事を云うのも別段相手にする必要はないが、同じ英国へ来たくらいなら今少し学問のある話せる人の家におつて、汚ない狭いは苦にならないから、どうか朝夕交際がして見たい。こう云う望があるから、へー行きましようとは答えなかつたが、自分の望み通りの人で下宿人を置く処があるかそれがすこぶる疑わしい。広い世界にはあるだろう。けれどもそれに逢着するのは難中の難事である。我輩の先生の処が一間あいておれば置てもらうのだけれども、それは間がないのだからできない相談だ。こう云う時になると西洋の新聞は便利だ。万事広告の世界なのだから下宿の広告がいくらでもある。我輩が以前下宿をさがす時 Daily Telegraph の下宿の広告欄を見た事がある。始めから終りまで読むのに三時間かかった事を記憶している。今は「テレグラフ」を取つておらん、「スタンダード」だ。この新聞は上品な新聞だからここへ出る広告なら間違はないと思つて四月十七日の分の広告欄を読み始めると、存外營業的のが多くつて素人家へ置きたいと云うのが少ない。しかしいろいろのがある。「宿料低廉、風呂付、食物上等」こんなのは普通なのだ。「ハイドパークに面し地下電気へ三分地下鉄道へ五分、貴

女と交際の便利あり」なんと云うのがある。「球突随意ピアノあり gay society, late dinner」これも珍らしくない。「レートジンナー」と云うのはこの頃の流行なのだ。我輩わがはいなどには至極しごく不便だ。その中で下のようなのを見出した。「立派なる室を有する寡婦及その妹と共に同宿せんとするあまり派出やかならざる紳士を求む。御望の方は〇〇筆墨店へ御一報を乞う」。まずここへでも一つあたってみようと云う気になったから直ぐ手紙を書いて、宿料その他委細の事を報知して貰いたい、小生の身分はかくかく職業はかくかく、なるべく低廉でなるべく愉快な処に住みたいと勝手な事をかいてやった。

その夜の十時頃自分の室へやで読書をしていると、室の戸をコツコツ叩くものがある。『Es, come in.』といったら宿の亭主がニコニコして這入はいつて来た。「実はあなたも御承知の通りこの度引越す事にきまりましたが、どうでしょう、向うはここよりも大分奇麗きれいでかつ器具などもよほど上等にしますが、来ていただく訳には参りますまいか」「それは君の方で僕に是非来てくれと言うのなら……」「イエ是非といつて御無理を願う訳ではありませんが、御都合がよければ——実は御馴染おなじみにもなっておりますし家内や妹も大変それを希望致しますから」「君の新宅へ下宿人を置きたいという事は僕も承知してはいますが、あなた僕でなくつても善よいだらうと思つてね」と実はこれこれだと話すと、亭主の顔が少々陰

気になつて来た。我輩も少々手持無沙汰である。「それじゃこうしよう、いずれ先方から返事が来る、来ればひとまず行つて室を見て、それが気に入らなかつたら君の方へ行くでしょう、ほかを探す事はやめにして。あの手紙を出す前に君の方の希望がどのくらいの程度だか分つていれば、聞き合せるまでもない御望みに応じたのだが、こうなつては仕方がない。まず先方の返事次第ですね。その代りほかはけつしてさがさない。あれがいけなればきつと君の方へ行きますよ」。亭主は御邪魔様といつて下りて行つた。

朝になつて食堂へ行くと誰もいない。皆んな飯をすました後である。ああ今日も寝坊して気の毒だなど思つて「テーブル」の上を見ると、薄紫色の状袋の四隅を一分ばかり濃い董色すみれいろに染めた封書がある。我輩に来た返事に違いない。こんな表の状袋を用ゐるくらいでは少々我輩の手に合はん高等下宿だなど思ながら「ナイフ」で開封すると、「御問合せの件に付申上候。この家はレデー（このレデーという字の下に棒が引いてある）の所有にて室内の装飾の立派なるはもちろん室々はことごとく電気灯を用いよき召使を雇い高尚優雅なる生活に適するように意を用い候。宿料は一週三十三円に御座候。あるいは御気に召さぬかと存じ候えども、御出被下候おいでくだされえば喜こんで室々御案内可仕候、敬具」。飯を食いながら呼鈴を押して宿の神さんかみを呼んだ。「とうとうあなたの方へ行く事に

しましたよ。一週三十三円の下宿料なんかどうてい我輩には払えんから君の方へ行きましようよ」「はあそうですか、どうもありがとう、なるべく気をつけますからどうぞさよう願いたいもので」。細君が出て行った後から亭主の首が半分戸の間から出た。「Thank you, Mr. Natsume, thank you.」と言ってニコニコ笑った。我輩も少々嬉しいような心持ちがした。細君と妹は引越しの荷ごしらえで終日急がしい。七時に茶を飲むときに食堂で逢った。

「今日は飼っていた鸚鵡おわむを売りました」と妹がいった。姉もまげずに「前使った学校の招牌んぼんも売りました。十円に買って行きました」と云った。

運命の車は容赦なく廻転しつつある。我輩の前および彼ら二人の前にはいかなる出来事が横わりつつあるか。我らは三人ながら愚な事をしているかも知れぬ。愚かも知れぬ、また利口かも知れぬ。ただ我輩の運命が彼ら二人の運命と漸々接近しつつあるは事実である。後を顧みてかの薄紫の貴女及びその妹の事とその門構もんがまえつき付の家を想像し、前を見てこの貧困なるしかし正直なる二人の姉妹とその未来の樂園と予期しつつある格子戸こうしどぐく作りを想像して、両者の差違を趣味あるようにも感ずる。また貧富の懸隔はかように色気なき物かとも感ずる。またミカウバーと住んでおったデヴィッド・カツパーフィールドのような感じもする。四月二十日。

三

朋友ほうゆうその朋友と共に我輩が生活を共にするところの朋友姉妹の事については前回少しく述ぶるところあつたが、このほかに我輩がもつとも敬服しもつとも辟易へきえきするところの朋友がまだ一人ある。姓はペン渾名あだなは *bedge pardon* なる聖人の事を少しく報道しないでは何だか気がすまないから、同君の事をちよつと御話して、次回からは方面の変つた目撃談觀察談を御紹介仕ろう。そもそもこのペンすなわち内の下女なるペンになぜ我輩がこの渾名を呈したかと云うと、彼は舌が短かすぎるのか長すぎるのか呂律ろれつが少々廻り兼ねる善人なる故に *I beg your pardon* と云う代りにいつでも *bedge pardon* と云うからである。ベツジ・パードンは名のごとくいかにもベツジ・パードンである。しかし非常な能弁家で、彼の舌の先から唾液だえきを容赦なく我輩の顔面に吹きかけて話し立てる時などは滔々とうとう 滾々こんこん として惜おしい時間を遠慮なく人に潰つぶさせて毫ごうも氣の毒だと思わぬぐらいの善人かつ雄弁家である。この善人にして雄弁家なるベツジパードンは倫敦ロンドンに生れながらまるで倫敦の事を御存じない。田舎いなかは無論御存じない。また御存じなさりたくもない様子だ。朝から晩まで

晩から朝まで働き続けに働いてそれから四階のアツチックへ登って寝る。翌日が出る
 と四階から天降あまくだつてまた働き始める。息をセッセとはずまして——彼は喘息持ぜんそくもちである——
 —はたから見るのも気の毒なくらいだ。さりながら彼は毫も自分に対して気の毒な感じを
 持つておらぬ。Aの字かBの字か見当けんとうのつかぬ彼は少しも不自由らしい様子がない。我
 輩は朝夕この女聖人に接して敬慕の念に堪たえんくらいの次第であるが、このペンに捕つて
 話しかけられた時は幸か不幸かこれは他人に判断して貰うより仕方がない。日本にいる人
 は英語なら誰の使う英語でも大概似たもんだと思つているかも知れないが、やはり日本と
 同じ事で、国々の方言があり身分の高下がありなどして、それはそれは千違万別である。
 しかし教育ある上等社会の言語はたいとい通ずるから差さ支さないが、この倫敦のロッ
 クネーと称する言語に至つては我輩にはとうてい分らない。これは当地の中流以下の用う
 る語ことばばで字引にないような発音をするのみならず、前の言ばと後の言ばの句切りが分らな
 いことほどさよう早く饒舌しやべるのである。我輩はロックネーでは毎度閉口するが、ベツジパ
 ードンのコックネーに至つては閉口を通り過してもう一遍閉口するまで少々草臥くたびれるから
 開口一番ちよつと休まなければやり切れないくらいのものだ。我輩がここに下宿したてに
 はしばしばペンの襲撃を蒙こうむつて恐縮したのである。やむをえずこの旨を神かみさんに届け出る

と、可愛想にペンは大變御小言を頂戴した。御客様にそんなぶしつけな方があるものか以後はたしなむが善かろうときめつけられた。それから従順なるペンはけっして我輩に口をきかない。ただし口をきかないのは妻君の内にいる時に限るので、山の神が外へ出た時には依然としてもとのペンである。もとのペンが無言の業をさせられた口惜しまぎれに折を見て元利共取返そうと云う勢でくるからたまらない。一週間無理に断食をした先生が八日目に御櫃おひつを抱えて奮戦するの概がある。

例のごとくデンマークヒルを散歩して帰ると、我輩のために戸を開いたるペンは直ちにしゃべり出した。果せるかな家内のもものは皆新宅へ荷物を片かた付つけに行つて伽藍堂がらんどうの中に残るは我輩とペンばかりである。彼は立板に水を流すがごとく、々び々び十五分間ばかりノベツに何か云つているが毫ちようもわからない。能弁なる彼は我輩に一言の質問をも挟ささしはめざるほどの速度をもつて弁じかけつつある。我輩は仕方がないから話しは分らぬものと諦あきらめてペンの顔の造ぞう作さくの吟味にとりかかった。温厚なる二重ふたえまぶた瞼まぶたと先が少々逆戻りをして根に近づいている鼻とあくまで紅くれないに健全なる顔色とそして自由自在に運動を縦ほしままにしていく舌と、舌の両脇に流れてくる白き唾とをしばらくは無心に見つめていたが、やがて気の毒なような可愛想のようなまたおかしいような五目ごもく鮫ざし司しのような感じが起つて来た。我輩

はこの感じを現わすために唇を曲げて少しく微笑を洩らした。無邪気なるペンはその辺に氣のつくはずはない。自分の噺はなしに身が入いって笑うのだと我点がてんしたと見えて赤い頬えくぼに笑靨えくぼをこしらえてケタケタ笑った。この頓珍漢とんちんかんなる出来事のために我輩はいよいよ変テコな心持になる、ペンはますます乗氣になる、始末がつかない。彼の云う所をあそこで一言ここので一句、分わつたところだけ綜そうじゆう合ごうして見るとこういうのらしい。昨日差配人が談判に来た。内の女連はバツが悪いから留守を使つかって追おい返した。この玄關げんかんの使命しめいを完まつたのがペンである。自分は嘘うそをつくのは嫌いやだ。神さまにすまない。しかし主命しゅめいもだしがたしでやむをえず嘘をついた。まずたいいこころ当りだろうと遠くの火事を見るように見当をつけてようやく自分の部屋へ引き下くだつた。我輩のトランクと書籍は今朝三時頃主人が新宅へ運んでしまったので、残るのは身体ばかりだ。何となく寂漠せきばくの感がある。夜の八時頃にコツコツ戸を叩たたいて這入はいって来た——例のペンが——今日差配人が四度来たという注進だ。それから何かいうが少しも解とかかぬ。あまり面倒だから善い加減にして追おさげろ。……十時頃にまたペンが来た。今度差配が来たらどうしようという。今度は相談のためだ。心配するには及およばんといつて慰なぐさめて引きさがらせる。十時半になるがまだ内うちのものは帰らない。もしここの亭主が詐欺師さぎしであつて我輩を置き去りにして荷物だけ取とって行いつたとすれ

ば我輩はアンポンタンの骨頂でさぞかし人に笑われるだろうと気がついた。やがて門の戸のあく音がする。帰つたらしい。まずアンポンタンにならずにすんだ。ありがたいと寝る。翌日が四月二十五日、九時頃起きて下へ行くと主人夫婦が今朝飯をすましたところだ。

我輩が食卓につくのを相図に昨夜の騒動を御存じですかと神さんが尋ねた。我輩は三階に寝るのである。下でどんな事があつたか少しも知らない。騒動つて何があつたのですと聞くと、例の差配人との悶もんちやく着ちやく一件である。昨夜彼らが新宅から帰つて家へ這はい入る途端とたん門口に待ち設けていた差配人は、亭主が戸をしめる余地のないほど早く彼らに続いて飛び込んで、なぜ断りなしにしかも深夜に引越をするそれでも君は紳士かと云うと、我輩が我輩の荷物をわきへ運ぶに誰に断わる必要がある。また何時に荷を出そうとこっちの勝手じゃないかと亭主が抗弁する。それからだんだん議論に花が咲いて壮語そつご四隣を驚かすと云う騒ぎであつたそうなる。元来この家は神さんの名前ばかりである。ところが七年前に少々家賃を滞とどおらしたのが今日まで祟たたつていて出る事ができん。しかも彼の財産は早晚家賃のかたに取られるという始末だ。しかし憐あわれなる姉妹は別段取押えられて困るような物も持つていない。差配もそれには目をつけておらん。ただこの老差配の目ざしているのは亭主その人の家財にある。亭主も二十世紀の人間だからその辺に抜かりはない。代言人の所へ行つ

てちゃんと相談している。日没後日出前なれば彼の家具を運び出しても差配は指を啣くわえて見物しておらねばならぬと云う事を承知している。それだから朝の三時頃から大八車をやと※つて来て一晩寝ずにかかつて自分の荷を新宅へ運んだのである。彼はすこぶる彪ぼうだい大なるシマリのない顔をしている。そこで申訳のために少々鼻の下へ髭ひげをはやしてはいるが、なかなか差配に負けぬ抜目のない男と見える。

我輩は亭主に自分の身体からだはいつ移れるのかと聞いたら今日でもよいというから、午飯ひるめしの後妻君と共に新宅へ引き移る事にした。

神さんと二人で午飯を食っていると亭主が代言人の所から帰つて来て神さんに、御前一つ手紙をかいて差配の所へ郵便でやれ書留にしなくてはいかんといつてまた出て行つた。

神さんはサラサラ何か書き始める。どんな手紙をかくか少々見たい心持でもある。やがて神さんは書き了おわつて「ちよつと〇〇さんこういう手紙なんです聞いて下さい」と高慢な顔をして手紙を読み始める。「拝啓妾は驚入申候。……どうですもう少しゆつくり読みましょうか……妾は驚き入申候。昨日は三度ならず四度までも留守宅へ御来臨の上下婢かひに向つて妾ら身の上に関する種々なる質問を発せられ、そのみならず無断にて人の家进行搜索ふいちようなされ、あまつさえ下婢に向つて妾はレデーの資格なきものなりなど余計な事を吹聴ふいちようせ

られ候由、元来右はいかなる御主意に御座候や伺度候。この乱暴なる貴下の挙動に対し妾は弁解を求むる権利ありと存候。……こう云うのです。これがね策なんですよ」と云うから我輩も少々驚き入申しておるところだが、策つて云うのはどんな策なんですと聞くと、先生いよいよ得意だ。ようござんすか、御手紙を書いてちやんとこの通り控えをとつておくでしょう、先方でもしこの事件を裁判沙汰にする日にはこれが証拠しょうこになつて差配が乱暴を働いたという種になるのですよ。今までは女二人だと思つてずいぶん勝手な事ばかりしたので、今じや男がついているからさうばかり踏みつけられちやいませんのさ、と間接に亭主の自慢を仰せられた。それから御待遠様それでは出かけましようと言うから出かけた。我輩は手提革鞄てさげかばんの中へ雑物を押し込んですこぶる重い奴やつをさげてしかも左の手には蝙蝠こつもりとステッキを二本携えている。レデーは網袋の中へ渋紙包を四つ入れて右の手にさげている。この渋紙包の一つには我輩の寝巻とヘコ帯はいが這入はいっているんだ。左の手にはこれも我輩のシートを渋紙包にして抱えている。兩人とも両手が塞ふさがっている。とんだ道行だ。角かどまで出て鉄道馬車に乗る。ケニングトンまで二銭宛だ。レデーは私が払つておきますといつて黒い皮の蓋がまぐち口から一ペネー出して切符売に渡した。乗合は少ない。向側にははで派出ななりをしている若い女が乗っている。すると我輩の随行しているレデーが突然あな

たはメリー・コレリのマスタークリスチアンを御読みなさいましたかと大きな声で聞た。これは近頃十五万部売れたというちよつと有名な本だ。我輩は書物は持っているがまだ読まないと答えた。「あの本はね、大変善くできていますね、どうも作者の宗旨が何だか分らないのですよ。私の知っている者なんか皆んなコレリの宗旨は何だろうって噂していますよ」とますます向側の婦人に聞えよがしである。自分だつて読んだ事もないのに鉄道馬車の中なんかでよせば善いと思つたが、仕方がないからウンウンと生返事をしていた。やがてケニングトンに着た。ここで馬車を乗り換る。こんどは上へ上がろうと云うから階子を登つてトツプへ乗つた。「この左りにあるのが有名な孤児院でスパージョンの記念のために作つたのです。「スパージョン」て云うのは有名な説教家ですよ」「スパージョン」ぐらい講釈しなだつて知つていら、腹が立つたから黙つててやつた。「だんだん木が青くなつて好い心持ですね、二週間ぐらい前からズツト景色が變つて来ましたね」「さよう、時にあすこに並んでいるのは何んて云う樹ですか」「あれ？ あれはポプラーでさあね」「へエーあれがポプラーですか、ナールほど」我輩は感嘆の辞を發した。神さ人はすぐツケ上る。「ポプラーはよく詩に詠じてありますよ、「テニソン」などにも出ています。どんな風の無い日でも枝が動く。アスペンとも云います。これもたしか「テニソ

ン」にあつたと思います」と「テニソン」専売だ。そのくせ何の詩にあるとも云わない。我輩は面倒臭いという風でウンウン云うのみである。向うの敷石の上を立派な婦人が裾を長く引いて通る。「家の内での御引きずりには不賛成ありませんが、外であんな長い裾を引きずつて歩行くのはあまり体裁の善いものではありませんね」と裾短かなるレデーは我輩に教うる処あつた。ようやく「ツーチング」という処へつく。今度は円太郎馬車で新宅の横町の前まで来た。「どれが内ですか」と聞いた。向うに雑な煉瓦造りの長屋が四五軒並んでいる。前には何にもない。砂利を掘った大きな穴がある。東京の小石川辺の景色だ。長屋の端の一軒だけ塞がついてあとはみんな貸家の札が張つてある。塞がついてるのが大家さんの内でその隣が我輩の新下宿、彼らのいわゆる新パラダイスである。這入らない先から聞しに劣る殺風景な家だと思つたが、這入つて見るとなおなお不風流だ。しかのみならずどの室にも荷物^{ほもの}が抛り込んであつてまるで類焼後の立退場のようだ。ただ我輩の陣取るべき二階の間だけが少しく方付^{かたづけ}てオラレブルになっている。以前の部屋よりも奇麗だ。裝飾もまず我慢できる。やがて亭主が出て来て窓掛をコツコツ打ちつける。ストーヴの上へ額をかけるが「ミツストロ」という額はいかがです、あれは人によると嫌いますがちよつと御覧に入れましよう^{いっ}と云て持つて来て見せた。何でも無い裸体画の美

人だ。「ハハー裸体画ですな、結構です」と冗談じょうだん半分にいったら「へへ私もちつとも構いませんがね」とコツコツ釘くぎをうってかける。「どうですこれで角度は……もう少し下向に……裸体美人があなたの方を見下すように——よろしゅうございます」。それから我輩の書棚を作つてやるという壁の寸法と書物の寸法をとつて「グードナイト」といつて出て行つた。

門前を通る車は一台もない。往来の人声もしない。すこぶる寂寥せきりょうたるものだ。主人夫婦は事件の到着するまでは每晚旧宅へ帰つて寝なければならぬ。新宅には三階に寝る妹とカーロー君とジャック君とアーネスト君である。カーロー君とジャック君は犬の名であつてアーネスト君はこの主人の店に使つている若き人間の名である。我輩の敬服けいぷしかつ辟易へきえきするベツジパードンは解雇されてしまった。我輩は移転後にこの話を聞いて慥然ぶぜんとして彼の未来を想像した。

魯西亞ロシアと日本は争わんとしては争わざらんとしつつある。支那は天子蒙塵てんしもうじんの辱はづかしめを受けつつある。英国はトランスヴハールの金剛石を掘り出して軍費の穴を填めんとしつつある。この多事なる世界は日となく夜となく回転しつつ波瀾はらんを生じつつある間に我輩のすむ小天地にも小回転と小波瀾があつて我下宿の主人公はその彪ぼうだい大なる身体を賭してかの小冠者

差配と雌雄しゆうを決せんとしつつある。しかして我輩は子規の病気を慰めんがためにこの日記をかきつつある。四月二十六日。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年7月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：大野晋

1999年11月13日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

倫敦消息

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>